

## 「助け主」

### 聖書の箇所：ヨハネ福音書 14：16～21

#### <導入>

コロナウイルスの感染が収まらず、緊急事態宣言も延長され、自粛生活が続いていますが、ある新聞で一つの現象が取り上げられていました。それは、現実と仮想との区別がつかなくなるという現象です。ある県会議員は「ワクチンにはマイクロチップが入っていて、殺人兵器だ」という主張を議会報告の冊子に載せ、住民に配布したそうです。また50代の男性は、「コロナはただの風邪」という手製のチラシを配り、ノーマスクで飲食する「コロナ飲み会」をしばしば開きました。そしてSNSに「コロナは人口削減計画の一環」と書き込みました。すると千人の人から反応があり、それを誇っていました。結局、その男性は離婚に迫られました。このような仮想のゆがんだ世界に入り込んだために、人格が壊れてしまう現象が起きています。

また教会のあり方に関しても、ゆがんでしまうことがあります。ある先生がインターネット上で「民主的な教会を装う権威主義的な教会」というタイトルで、次のように指摘されていました。「1980年代から教会成長論を導入した教会で、信徒の増加が顕著になってきた。教会は、信徒の数が増えると行き届かなくなる。そこで、牧師は権威を強調し、従うように強制するようになってきた。そうして、権威主義的な教会が生まれた。権威主義的な教会では、教会総会がない場合がある。権威主義的な教会は、信徒が牧師にとにかく従うように求められる。何をしても牧師に伺いを立てるところもある。このような教会では、信徒たちは選ばれた選民という霊的エリート集団と思い込み、熱心な「信仰生活」を過ごして、非常識な行動を『信仰』と思い込む。そのため、家庭崩壊や友人関係の破壊が生じている」とありました。教会のかしらはキリストです。しかし、教会は罪赦された罪人たちの集まりですから、このようにゆがんでしまうことがあります。そして恐ろしいのは、教会を構成する人たちが教会のあり方がゆがんでいることに気がつかないことです。このように時代とともに、教会のあり方や信仰の姿は変わります。

初代教会には新約聖書はありませんでしたが、イエスに対する信仰は迫害を受けても揺るぐことなく、教会は成長しました。そしてキリスト教は、あのローマ帝国で国教となりました。何がそのようにさせたのかを探っていくと、そこには信仰の基準があったことがわかります。信仰の基準は、信条としてまとめられました。初代教会には、主に四つの信条がありました。それによって、異端という間違っただけの教えに妥協することなく、成長を遂げました。四つの信条とは、使徒信条・ニカイヤ信条・カルケドン信条・アタナシオス信条です。使徒信条の柱は、「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。・・・我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。・・・我は聖霊を信ず。・・・」です。つまり“父なる神様・子なるイエス・キリスト・聖霊なる神様”への信仰の告白です。他の三つの信条も、使徒信条の柱を維持しつつ、それぞれの説明に違いがあるだけです。聖書は、この「父なる神様・子なるイエス・キリスト・聖霊なる神様」、いわゆる三位一体の神様への信仰が土台です。子なるイエス・キリストを人間イエスと見たり、人間の知識を超えた神様のみわざを否定したり、聖霊は聖書の世界のことで、現代には聖霊の働きはないと主張されることもあります。また聖書を神様の言葉として認めず、一つの古文書として研究の対象にします。それらは私たちの信仰の柱を奪うことになり、当然そこには健全な信仰は育ちません。今日は、イエスが語られた「聖霊なる神様」の約束に目を留めましょう。

## I. 聖霊なる神様

▽ヨハネ14：16　ここで、イエスは聖霊なる神様が送られることを約束されました。この約束は、あのペンテコステの日に実現しました。確かに、その日以来弟子たちは聖霊の力に満たされ、イエスの復活を大胆に宣べ伝え、教会が次々生まれました。Iコリント12：3「聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」とあります。「イエスは主です」というのは、初代教会で行われていた信仰告白です。イエスを主として信じる告白は、聖霊によります。人の理解や判断、また決断も働きますが、聖霊がイエスを信じる告白に導かれます。私たちが、今クリスチャンとしてイエスを信じて生きているのは、聖霊の働きです。私たちは、聖霊の働きを体験しています。今も多くのクリスチャンがいること、教会があること、宣教師の働きによって世界中で宣教が展開されていることは、聖霊が働いておられる証拠です。

聖霊は「ひとりの助け主」と言われています。「ひとりの助け主」というギリシャ語の原語は「パラクレートス」です。この言葉には日本語では表し切れない深い意味があります。一つは、「招き入れられる者」という意味です。何のために「招き入れられる」のでしょうか。例えば法廷で誰かのために証言することを求められ、招き入れられた人です。その人の言い分を弁護するために招き入れられる弁護人です。この意味は神様の御前に立った時、イエスが私たちのために弁護してくださるお方として示されています。Iヨハネ2：1　新改訳「御父の前で弁護する方」として「義なるイエス・キリスト」がおられます。聖霊は、イエスと同じように、私たちが罪を犯し、失敗した時、私たちが弁護して助け、その報いである罰を免がせて下さいます。それとともに、聖霊は困難な状況に陥ったときに、どうすればよいのかを忠告するために招き入れられた専門家です。聖霊は、常に困難や苦悩、当惑のもとにある人を助けるために招き入れられます。私たちが困難に直面してどうすればよいかわからない時、聖霊に聞きましょう。聖霊が一番よい、賢明な道を教えて下さいます。もう一つの意味は、「慰め主」です。慰めるという意味はラテン語の「勇氣」に由来し、落胆している人に再び勇氣を与え、立ち上がらせる者です。慰めると言いますと、悲しんでいる人のそばにいて同情すると考えがちですが、そればかりではなく失望落胆の原因を乗り越える力を与えられます。聖霊は困難に打ち勝つ力を与え、勝利の生活に変えられます。それとともに、「パラクレートス」と言う言葉には「私たちの友」「私たちの導き手」「私たちの主」「私たちを守る方」「私たちの祈り手」という意味もあります。要するに、聖霊はイエスのようなお方です。イエスはこの地上におられませんが、聖霊は私たちのうちにおられて、イエスのようなお方として働きをされます。聖霊は、私たちが困難に直面したとき助けて下さり、立ち上がる力を下さいます。そういう意味で、聖霊は助け主です。

▽ヨハネ14：17　聖霊は、「真理の御霊」です。聖霊は、神様の真理を示されます。聖霊に導かれているならば、神様の真理から迷い出ることはありません。イエスに対する信仰の道をまっすぐに進むことができます。「世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです」。「世」とは、神様が存在しないかのように生き、神様を閉め出しているような人々を意味します。そればかりではなく、自分の観察や経験に頼っている人のことも指していると言われています。つまり、聖霊がされることは、私たちの経験や知識を超えている場合があります。聖霊は「あなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられる」のです。聖霊の圧倒的な臨在に触れ、異言やいやしが起こることもあります。聖霊は私たちの思いを超えた道を示して困難を乗り越えさせて下さいます。聖霊は、風があらゆる方向から吹くように、いろいろな形で働かれます。また聖霊は、祈りの中で、聖書を読むうちに静かに私たちの心に語られることもあります。決して私たちの心に押し入ることはされません。私たちは、その語りかけにすなおに従えばよいのです。

## II. 聖霊がもたらされるもの

▽ヨハネ14：18～20 ここには、聖霊が私たちのうちにもたらされることが示されています。要するに、聖霊は私たちがキリストを知るように導かれます。私たちは、もっとイエスを知り、イエスのように生きたいと願います。そのためには、どうしてもイエスを現わされる聖霊が必要です。19節、20節で、キリストを知ることの三つの面を見ます。それは「見る」「生きる」「わかる」です。19節「あなたがたはわたしを見ます」。聖霊を受けるなら、私たちはいつでもどこでもキリストを見ることができます。神様を信じない者は、キリストを見ることができません。聖書を読んでも、そこにキリストを見ることができません。「見る」とは、肉の思いで見ることではありません。聖霊が下さる霊の目、信仰の目で聖書の中にキリストを見るのです。心で、霊の目でキリストを見ているならば、私たちは一人ではありません。いつもイエスがともにおられることを、日々の生活の中で見るからです。それで18節にあるように、私たちは孤児ではありません。聖霊が、私たちとともにイエスがおられることを明らかにされます。二番目は、「わたしが生き、あなたがたも生きるようになる」。このいのちは、よみがえりのいのち、朽ちないいのちです。ローマ6：4、5 イエスのよみがえりは、私たちに「新しい歩み」をもたらします。聖霊は、イエスのよみがえりと私たちのよみがえりが同じようになると教えます。そういう意味で聖霊は、私たちが今も生きておられるイエスと堅く結びついていることを心にはっきりと示します。三番目は、20節「あなたがたにわかります」。何が、でしょうか。「わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおる」ことです。イエスと神様が一体であるように、クリスチャンがイエスと一体であることがわかるのです。このことは、イエスの再臨の時に天国において実現します。しかしイエスの約束ですから、必ず実現します。今は肉体があり、まだぼんやりとしかわかりませんが、必ず私たちはイエスと一体となり、決して離れないという望みがあります。その将来の約束を、聖霊は私たちに教えられます。イエスと一つとなるという輝かしい天国への希望を、聖霊は私たちの心のうちに明らかにされます。要するに、聖霊に導かれれば、イエスのことがわかります。

## III. 聖霊の体験

▽ヨハネ14：21「わたしの戒めを保ち、それを守る人」とあります。このことは、何も特別なことでもありません。賛美したり、祈ったりして、恍惚状態になる必要はありません。聖書を読み、聖書に親しみ、神様の言葉に従って歩もうとすることです。コロサイ3：16「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ」とあります。私たちは律法の下にはいません。私たちが聖書に親しむのは、愛するイエスを知りたいからです。人は愛する人のことをもっと知りたいと願います。愛するイエスのことを、聖書を通して知ります。聖書に親しんでいけば、聖霊がイエスのことをわからせて下さいます。二番目は「わたしを愛する人」ということです。私たちは愛する人といつまでも一緒にいたいと願い、いつも愛する人のことを思います。愛するイエスのことを考え、いつもイエスのことを意識しているならば、聖霊がイエスを明らかにされ、人の思いを超えたことを示されます。いつもイエスのことを覚えているならば、「わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします」。イエスを愛しているならば、神様の愛がわかります。それとともにイエスに愛されていることもわかります。そしてイエスご自身を知るようになります。それは、聖霊が私たちにもたらされる神様の恵みです。知識によってではなく、聖霊によってキリストを知ることです。キリストの救いの力、キリストの恵み、キリストの栄光、キリストの約束を知ります。これがクリスチャンとして生きる喜びです。イエスのことがわかれば、イエスとともに生きる確信が強くなります。そのために聖霊が私たちのうちに住んでおられます。聖霊に助けられて、聖書からもっとキリストを知っていきましょう。